

昔ばなしをとおしてみる真実

今坂柳二

狭山市史で民俗編を担当された大護八郎さんは、その前書で、「十年を費やして専門家が書いた市町村史とは言っても、それは実態のほんの一部にすぎない」と言われた。私が昔話の採集を続けている理由の一つに、先生のこの言葉があるのは間違いない。

次回の出版で二百話近くなる話には、民俗すなわち庶民が登場する話が過半を上回るけれども、ヤマトタケルや神武の東征、征夷大將軍の記述について少しばかり割り切れない思いがある。タケルが討った長脛彦(スネヒコ)とか土グモの一族、東征の対象になった人々とは何か。征夷の「夷」とは何か。新編武蔵風土記稿によく見られる「土人いわく」の土人とは何か。

私たちが習った国語読本は、これら全てを正と邪の関わりで記述していた。また考古学では弥生期の痕跡がまるで見当たらないという。

次の昔話集に載せる予定の飯能市域取材の話では、タケルの入村をこぼんだ猪の一群が出てくる。道を閉ざされたタケルは、天照の大神に応援をお願いして猪群団を倒すことができた。死骸を埋めた上に植えたのが県指定の天然記念物「猪狩の大モミ」だとされるが、この猪の群団も、どうやらその地の「土人」軍団のように思えてしまう。そうでなくては村を守ろうと戦った者たちの霊を祀るかのような記念の木を植えた理由が見つからないではないか。

他にも、タケルの道案内をする三頭の猪たちの話もあって、こちらは案内を終えると三ヶの大岩と化してしまうのだが、以後、村人が山に入るときはこの石を撫でておくと道に迷うことなしとする話も伝わっている。299号道の傍らに今もその石がある。

長スネヒコ、土グモ、風土記の土人、征夷の対象にされた東エビスや猪たち。彼らは、もしかしたら私たちの祖先かも、なんてふと思ってしまうのであるが、さて、歴史と昔話はどちらが真実を伝えようとしているのだろうか。

- いまさかりゅうじ： 狭山市笹井在住。24歳から俳句に関わって、現在同人誌「つばさ」代表。かたわら、昔ばなしの採集・再話を続け、「龍じいの昔ばなし」以下9冊発行。



飯能市 神明神社の「猪狩の大モミ」
枯死のため県指定を解除され、現在は第2世代が植えられている。
(1997年 高橋 弘氏による撮影)



借宿神社の境内にある大岩



飯能市長宿の借宿神社
299号のトンネル工事で周囲も様変わりした

編集後記

4月4・5日の第16回 桜まつりも間近かになり、開花時期と天気
が気になりますが、満開の下で行いたいもの。

芸術祭では、私も2日にわたり出演。大ホールでは、有料公演
でも有り、緊張しました。会員仲間が大勢出演してくれ、舞台を
盛り上げてくれ、有難かった。

(高沢正夫)